

V 一九六〇年代以降の教員養成政策の動向と 東京学芸大学の発展

一九六〇～八〇年代にかけての日本社会は、高度経済成長期にあたり、教育機会の量的拡大と激しい受験競争に象徴される競争の時代であり、また国の教育政策が厳しさを増す時期であった。東京学芸大学においては、一九六四（昭和三九）年の世田谷分校の小金井キャンパスへの統合を起点として、教員養成制度の改正の動きに伴う教員養成系大学としての組織再編、大学の充実化のための組織・設備の整備や教育研究活動のための組織・機関（専攻科、大学院修士課程、センター・施設等）の設置が進んだ時期であった。『東京学芸大学五十年史』（一九九九）においては、「拡充・発展期」（一九六四～七五年）、「展開期」（一九七六～八六年）と時期区分されている。

1 一九六〇年代以降の教員養成制度改革と東京学芸大学

課程―学科目制の導入

一九五八(昭和三三)年七月二八日に出された中央教育審議会(以下、中教審)答申「教員養成制度の改善方策について」において、戦後の教員養成制度の特徴の一つとして開放制(教員養成を主とする大学・学部でなくとも、教職課程を履修し、所定の単位を取れば教員免許を取得できる制度)を挙げつつ、近年、単に資格を得るために最低限の単位を形式的に取得する傾向があり、その結果「職能意識はもとより教員に必要な学力、指導力すら十分に育成され得ない実情」があり、これが教員の質の低下をもたらした要因であるとしている。また、教員養成を主とする大学においてもその目的が必ずしも明確に掲げられておらず、教員の需要も計画的でない現状を批判した。そのうえで、専門職業としての教員に要請される高い資質育成のためには、教員の養成を国の定める基準によって大学において行うこと、この基準に基づき教員養成を目的とする大学を設置することが提案された。この答申は、国家による教員養成の統制を意味し、戦後の教員養成制度の根幹を揺るがす提案であった。反対意見がかなり強かったこともあり、この改革方策がそのまま実施されることはなかったが、その後の教員養成制度改革の議論の基調となっていた。

一九六三年一月に出された中教審答申「大学教育の改善について」において、高等教育機関の種別

化が提言された。これを受ける形で同年三月に「国立学校の一部を改正する法律」が出され、国立大学の学部において、文部省令により学科または課程を置くことが法的に根拠づけられた。そのうえで、一九六四年二月に文部省令「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が出され、すべての国立大学の学部の内部組織が規定された。具体的には、旧制大学を基礎とする新制大学・学部は「学科―講座制」、旧制高等学校、専門学校を基礎とする大学・学部は「学科―学科目制」、そして本学をはじめとする師範学校を基礎とする大学・学部は「課程―学科目制」とされた。文部省の説明によると、「学科」とは教育研究上の学部の内部組織で、「課程」とは学部の性格上学科を置くことが適当でない場合における教育上の学部の内部組織であり、教員養成系大学・学部が全国一律に「課程―学科目制」となることは教員養成を目的とする、教員養成のためだけの教育を行う組織となることを意味し、それは教員養成系大学・学部への「差別化」、格差の固定化を意味するものであった。

この省令の制定に際して、前年の一九六三年一月に省令原案が各大学長あてに送付されたが、これに対して教育学関係学会や教員養成系大学から意見や要望が表明された。本学においても、深刻な事態と受け止め厳しい批判が噴出し、「教員養成関係の大学・学部だけをこの制度によることとするのは、将来大学間の格差を生む懸念が十分あるので、そのようなことを来さないよう万全の措置を講ぜられたい」とした意見書が提出されたが、それらの意見によって省令案が変更されることはなく、一九六四年二月に大学の学部内部組織は一律に規定されることとなったのである。しかし後述のように、一九六六年に大学院修士課程が設置されると、学部の学科目が講座に組み入れられ、予算等の格差が解消されていくとの見方が強まり、学内における「課程―学科目制」への関心は次第に薄れていったという（『東京

学芸大学・学芸学部名称変更問題

一九六五年から一九六七年にかけて、国立の学芸大学・学芸学部がほぼ一斉に名称を変更した。一九六五年四月に、東北大学教育学部の教員養成課程を分離して宮城教育大学を創設したことを嚆矢とし、翌一九六六年には大阪学芸大学と秋田大学学芸学部以外のすべての学芸大学・学芸学部が教育学・教育学部となり、翌一九六七年には残る大阪学芸大学と秋田大学学芸学部もそれぞれ名称を変更した。本学の場合は、すでに東京教育大学（現・筑波大学）が存在していたため、大学名として学芸大学は残り、一九六六年に学部名のみを学芸学部から教育学部に改称した。

この教育大学・教育学部への改称は、教員養成系大学の目的・性格の明確化のために行われたものであり、単に名称を変更したということではなく、一九五八年の中教審答申以降の一連の教員養成制度改革に連なるものであった。前述の教員養成系大学の「課程―学科目制」への転換は批判や反論が噴出したが、この名称変更については、本学をはじめ全国的にあまり強い抵抗なく受けとめられていったという。その理由については、『東京学芸大学五十年史』では、教育刷新委員会による戦後教育改革の具体的方向性の審議以来、「旧師範学校はむしろ教員養成を目的とする「教育大学・学部」の創設をめざして」おり、「新制大学発足後に設立された教大協の名称が「日本教育大学協会」であったのは、そのような元来の志向性を暗示しているのかもしれない」と説明している。「課程―学科目制」導入と学芸大学・

学芸学部からの改称により、教員養成系大学の組織の画一化と目的明確化とがなされたのである。

2 教育研究組織の改編およびカリキュラムの改訂

教育研究組織の設置と改編

一九五〇（昭和二五）年に「学則」を制定して以降、東京学芸大学の教育研究組織は学芸部（一般教養科目、専門科目）と教育部（教職科目）の二部制をとってきたが、一九六四年に世田谷分校と小金井分校が廃止となり、小金井キャンパスに統合されるにあたり、改組されることとなった。新たな教育研究組織は三部制で、第一部に人文・社会科学に関する学科および教科教育、第二部に自然科学に関する学科および教科教育、第三部に実技・実習を伴う学科および教科教育をおいた。二部制では分かれていた教育系講座が各部に組み込まれる形となった。一九七三年には四部制に移行したが、これは人数の多かった第一部（人文・社会科学系）を二分割し、平均化したものであった。

『東京学芸大学カリキュラム』の第一次改訂（一九五五年）

一九五二年制定の『東京学芸大学カリキュラム』が実施されたのち、学内では教育課程の構造や実施

表V-1 1970年代までの教育研究組織

年	部	講座
1950年 (二部制)	学芸部	人文科学関係、社会科学関係、自然科学関係、家政及産業関係、美術及体育関係
	教育部	教育科学関係、各科教育関係(教科教育含む)
1964年 (三部制)	第一部	国語国文学、漢文学、英語英文学、ドイツ語、フランス語、教育学、教育心理学、学校図書館学、聾教育、養護学校教育、幼稚園教育、国語教育、英語教育、哲学、法学、経済学、社会学、史学、地理学、社会科教育
	第二部	数学、物理学、化学、生物学、地学、数学教育、理科教育
	第三部	音楽、美術、書道、芸術学、音楽教育、美術教育、家政学、農学、工学、商学、体育学、体育科教育、家庭科教育、職業教育
1973年 (四部制)	第一部	国語教育学科、英語教育学科
	第二部	社会科教育学科、学校教育学科、特殊教育学科
	第三部	数学教育学科、理科教育学科
	第四部	音楽教育学科、美術教育学科、保健体育学科、家庭科教育学科、技術科教育学科、特別教科(書道)教員養成課程、職業科教育教員養成課程

表V-2 東京学芸大学 課程の変遷

年	1949年～	1953年～	1955年～	1966年～
学部	学芸学部			
課程	一部＝四年課程 ・甲類 初等教育学科 ・乙類 中等教育学科 二部＝二年課程 ・甲類 初等教育学科 ・乙類 中等教育学科 ・丙類 幼稚園教育学科	一部＝四年課程 ・甲類 初等教育学科 ・乙類 中等教育学科 二部＝二年課程 ・甲類 初等教育学科 ・乙類 中等教育学科 ・丙類 幼稚園教育学科 ・丁類 特殊教育学科	・甲類 初等教育学科 ・乙類 中等教育学科 (※二部＝二年課程廃止)	・A類 初等教育教員養成課程 ・B類 中等教育教員養成課程 ・C類 特殊教育教員養成課程 ・D類 特別教科教員養成課程 ・E類 幼稚園教育教員養成課程 (幼稚園教育教員養成課程は1967年～)

年	1988年～	2000年～	2007年～	2015年～
学部	教育学部			
課程	・A類 初等教育教員養成課程 ・B類 中等教育教員養成課程 ・C類 特殊教育教員養成課程 ・D類 特別教科教員養成課程 ・E類 幼稚園教育教員養成課程 ・K類 国際文化教育課程 ・N類 人間科学課程 ・J類 情報環境科学課程 ・G類 芸術課程	・A類 初等教育教員養成課程 ・B類 中等教育教員養成課程 ・C類 障害児教育教員養成課程 ・L類 生涯学習課程 ・N類 人間福祉課程 ・K類 国際理解教育課程 ・F類 環境教育課程 ・J類 情報教育課程 ・G類 芸術文化課程	・A類 初等教育教員養成課程 ・B類 中等教育教員養成課程 ・C類 特別支援教育教員養成課程 ・D類 養護教育教員養成課程 ・N類 人間社会科学課程 ・K類 国際理解教育課程 ・F類 環境総合科学課程 ・J類 情報教育課程 ・G類 芸術スポーツ文化課程	・A類 初等教育教員養成課程 ・B類 中等教育教員養成課程 ・C類 特別支援教育教員養成課程 ・D類 養護教育教員養成課程 ・E類 教育支援課程

に関する検討が続けられた。一九五五年度に二年課程が廃止されることとなり、また、初等教育学科に「教育・心理選修」が加えられることとなった。これを機に、一九五五年四月、カリキュラムの第一次改訂が行われた。その概要は、二年課程の廃止、外国語の履修可能単位の増加、初等教育学科内に教科選修のほかに新たな教育・心理選修の加設、教育実習の内実の明確化などである。

二年課程が廃止されたのは、教員の需給において、その必要性がなくなつたからであると説明がされている。また、外国語を重視したのは、将来深く教育・学術研究をすすめる素地をなすためであるとしている。この一九五五年の第一次改訂は、改訂というより、一九五二年カリキュラムの整備・充実という意味合いが強く、曖昧であつた部分が明確化されたものであつた。

『東京学芸大学カリキュラム』第二次改訂（一九六六年）

学部名が教育学部に改称した一九六六年、『東京学芸大学カリキュラム』の第二次改訂が行われた。第一次改訂が出された直後の一九五六年度にはカリキュラム委員会が設置され、第一次改訂カリキュラムの再検討が開始された。当初の検討の方向性は、履修基準総単位数および授業時間の軽減による自由な学習機会と課外活動の余裕を与えること、各課程の独自性の発揮と授業科目相互間の関連・統合を図ることなどであつた。

一九五九年には継続してカリキュラム委員会が設けられたが、ここでは再度第一次改訂カリキュラムの現状および問題を分析するとともに、改訂実施案の基本案が作成されることとなった。カリキュラム

委員会は、カリキュラムの全面的で根本的な再検討と改善の提案が必要という結論に至り、一九六二年一月に「教員課程の基本構成案」がまとめられた。この中で「目的規定に関する提案」として、「(1) 本学では原則として学校教育者の養成を目的とする」と打ち出された。この提案に関する審議過程として、「学校教育者の養成を主たる目的とする」か「学校教育者の養成を目的とする」かで意見が分かれたが、委員会としては本学の使命が義務教育諸学校の教員養成を中心とするものであるとの認識から、必ずしも免許資格の取得を必要としないもしくは学校教育者以外の可能性を排除すべく、「主たる目的とする」の「主たる」の部分削除した。他の可能性を排除することにより、学校教育者の養成を中心に据えたカリキュラムとして目的を明確化することが提案されたのである。一九六三年に修正案が作成され、一九六四年には基本案が教授会で承認され、一九六六年四月に第二次改訂が行われた。

この第二次改訂では、おもに以下のような方針に基づき履修基準が決定された。

- ① 履修基準を従来の一三六単位から一四〇単位とする。
- ② 一般教育科目の中に基礎教育科目を開設する。
- ③ 教科教育学を教職科目から独立した位置づけにする。
- ④ 各専攻・選修教科に傾斜をもたせるピーク方式をとる。
- ⑤ 枠外の自由科目を開設する。
- ⑥ 一般教育科目を前期二か年で履修させる。
- ⑦ 専門科目を強化するうえで一免許主義をとる。

一九五五年の第一次改訂カリキュラムと比べて、一般教育科目が人文・社会・自然の三系統に区分されたこと、保健体育科目が実技と理論に分かれたこと、一般外国語科目が独立し、英語（必修）とドイツ語・フランス語（選択必修）に分かれたことなどが主な変更内容であった。履修基準総単位数は四単位数増加され、一単位あたりの授業時間数は、講義の場合一〇分一五週で二単位、演習は一〇分一五週で一単位（一九六九年より一時間一〇〇分に変更）となった。ちなみに当時一日の授業は午前中二時間、午後二時間の計四時間であった。カリキュラム改訂を検討し始めた当初は「自由な学習の機会と課外活動の余裕を与え」ることがめざされたが、実際にはよりタイトな内容となった。

なお、このカリキュラム第二次改訂と併せて課程が変更され、それまで甲類、乙類、丙類だった名称が、A類 初等教育教員養成課程、B類 中等教育教員養成課程、C類 特殊教育教員養成課程、D類 特別教科教員養成課程、E類 幼稚園教育教員養成課程となった。

『東京学芸大学カリキュラム』第三次改訂（一九七九年）

一九六六年に第二次改訂が行われたのち、一九七三年に改訂カリキュラム委員会が設けられ、翌年からは改訂カリキュラム実施検討委員会に引き継がれ議論が継続された。学生の意見を聞く「カリキュラム検討会」も開かれ、大学設置基準一部改正や高等学校学習指導要領改訂を踏まえた内容で一九七九年に改訂が行われた。具体的な内容は以下のとおりである。

- ① 卒業基準単位は、類により異なり、現行の一四〇単位より一二四〜一三一単位に引き下げる。
- ② 一般教育科目では一部を除いて全学生が自主的に選択履修できるように開設する。また、社会、人文、自然の三分野のうち、二分野以上にわたるもの、或いは一分野でも総合科目的な性格をもつ科目を開設する。
- ③ 基礎科学では現行よりも必修科目を減らし、選択科目を多く開設する。また、類、専攻、選修を超え、且つ、学科を超えて履修することも一定程度で可能にする。さらに、卒業研究を基礎科学に位置づける。
- ④ 教育科学では、必修科目と選択科目とに分けて開設する。
- ⑤ 道徳教育の研究では、新たに地理学的領域からの開設を加える。
- ⑥ 教育実地研究では、B、D類の協力校における実習に自主的に参加できるよう選択科目を開設する。また、病気・障害等のため教育実地研究が不可能となった者の特例事項を設ける。
- ⑦ 枠外自由科目では、本学免許状資格取得の許された範囲で取得できるように開設する。また、新たに社会教育主事および学芸員（一部授業科目が認められれば）資格取得のための開設をする。

最低習得単位数の引き下げ、全体として選択履修の幅を広げるなど、「拘束性や硬直性をできるだけとさほぐして、学生の自主的な学習研究活動の充実をはかろうというもの」であった（『東京学芸大学五十年史』一九九九）。一四〇単位にまでふくれあがった卒業基準単位数を、大学設置基準に近づけようとする改訂であった。

3 一九六〇年代から一九七〇年代の学生の動向

六〇年安保闘争と学生の動向、大学生協の設立

安保闘争とは、一九五九(昭和三四)年から一九六〇年、一九七〇年の二度にわたり行われた日米安全保障条約(安保条約)改定に反対する国会議員、労働者、学生、市民等が参加した反政府、反米を掲げる大規模なデモ運動を指す。この運動は全国各地の大学や高校などにも波及し、本学学生もその影響を受けている。

『東京学芸大学五十年史』は、本学学生の安保闘争への取り組みについて、他の大学と同じように「クラスやサークルの討論活動を重ねながら学生の総意を形成し、国会請願デモへと高められていった」と述べたうえで、本学教員であった山崎真秀の見解を紹介している。山崎は、東京学芸大学教職員組合機関紙『あしなみ』(一九六〇年七月)に論文を寄せ、本学学生が安保闘争に至るまでの運動で学んだ教訓は、「大学自治の主体の一部として彼ら自身を位置づけてきたが、彼らの期待や自覚の方向とは相容れない管理・教育体制が用意されていることの発見であった」と論じている。

教育心理学を専門に学ぶ学生を中心とする学生生活研究会が、一九六三年から翌年にかけて、大学や授業に対する満足度を調査しその結果を公表している(『教師への道―東京学芸大学における沈滞現象の実証的探求』一九六四)。この調査結果によると「授業」に対して七六・三%の学生が「まったく不満足」「や

や不満足」と回答し、「非常に満足」「やや満足」と回答した七・四％の学生を大きく上回る結果となった。

一九六四年は、大学が小金井キャンパスに統合された年であり、その影響が出ている可能性はあるが、『東京学芸大学五十年史』では「六〇年安保闘争を乗り越えて、学生も教官も教育研究という大学本来の目的に向かって歩み始めた結果」ではないかと評価している。

同時に、キャンパス生活の点でも改善が見られたのがこの時期であった。一九六〇年二月に学内の福利厚生を担う団体として、多くの学生・教職員の賛同を得て東京学芸大学生生活協同組合が設立されたことは注目される出来事である。当初の会員数は二二〇〇人、店舗は規模が小さく、営業面積は約五〇〇㎡と現在の五分の一以下で、そこに食堂と書籍・文房具の店が開店した。その後、大学生協は一九八〇年代にかけて規模も拡張され、理髪店や喫茶店なども開設されていた。

サークル活動の展開と一九六九年の小金井祭

『東京学芸大学五十年史』では、一九五〇年代後半から六〇年代にかけて活躍した教育実践系のサー



写真V-1 東京学芸大学生生活協同組合・購買部 (1960年代)

クル活動を紹介している。本学には子どもとの交流と子ども理解を目的に活動を展開する演劇サークルや子ども会活動サークル、人形劇サークルなどがあるが、この時期は近隣地域だけではなく地方巡演なども活発に行われ、活動範囲が全国規模におよぶサークルもあった。

特に、児童文化研究部の活動はめざましく、毎年さまざまなおも向けの上演作品を創作し、都内のみならず東北地方や八丈島、伊豆大島などの離島へも足を伸ばして上演し、現地の子どもたちとの交流を積極的に深めていた。『東京学芸大学五十年史』には、児童文化研究部の学生たちが、夏休み期間のほぼ三〇日間、全国の子どもたち七万人と交流したとの記録を紹介し「偉業」と呼んでよいと評価しているが、まさにそのとおりである。

教育実習以外に子どもと触れ合う機会を自らの努力と創造力で開拓し、子どもたちに楽しみの場を作り、励まし、理解しようとする学生たちの姿は、教育や子ども文化に対する本学学生の情熱以外の何物でもない。

一九六九年の小金井祭

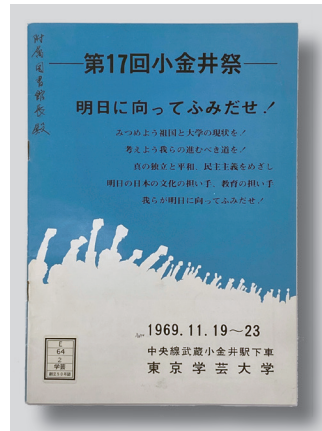
一九六九年に開催された第一七回小金井祭は、当時の大学をめぐる社会状況や雰囲気を反映した内容となっている。東京学芸大学大学資料室に保存されているパンフレット(写真V-2)からその一端を見てみよう。

統一テーマは「明日に向かってふみだせ！」である。表紙には、「みつめよう祖国と大学の現状を！」「考えよう我らの進むべき道を！」「真の独立と平和・民主主義をめざし、明日の日本の文化の担い手、

教育の担い手、我らが明日に向かってふみだせ！」と時代を反映したさまざまなスローガンが掲げられている。パンフレットを見ると政治問題、社会問題、特に教育に関するさまざまな企画が立てられている。興味深いのは、小金井祭実行委員会によって政治・社会問題と直結する課題や意義について説明されていることである。掲げられた小金井祭の意義は四点にわたって説明されている。①クラス・サークル・ゼミを基盤とした、自主的学問研究、文化、スポーツ活動を発表し、発展させる中で、これらの方を追求する場、②七〇年を前にした安保、沖縄などの情勢を明らかにし、大学の民主的変革への展望を明らかにしていく場、③学内諸階層の交流をはかり、統一と団結を深める場、④広範な市民と交流し、地域と社会との関連を考え、地域の人々とともに考え、地域の文化を発掘し普及し、私達の学問、文化、スポーツ活動を還元していく場である、とその意義が説明されているが、最近の小金井祭とは隔世の感があり、当時の大学祭のあり方をよく表している。

七〇年代の学生運動と寮問題

一九七〇年三月に東京学芸大学新聞会から発行された『東京学芸大学新聞』第一六一号(写真V-3)は、一面の見出しに「「東学大闘争」は可能か？」というセンセーショナルな見出しを掲げている。



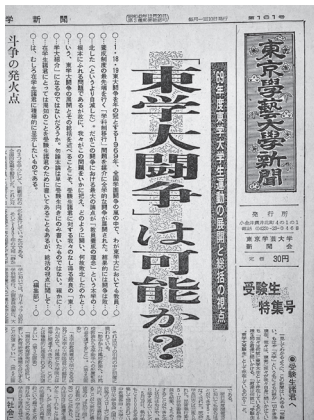
写真V-2 第17回小金井祭
パンフレット (1969年)

同紙によると「学科制移行」問題を中心に大学、教授会との「闘争」となり、結果的に学生側が「敗北」したと報じている。

これは、一九六八年頃から教授会で議論されていた「学科制移行」の件が学生に公開されないままに進められていたことに端を発した学生運動である。「目的大学化の完成」学科制移行白紙撤回」をスローガンに教員養成の理念なども含めて学長との団交（団体交渉）なども数回行われたが、大学側は一貫して「教官の研究体制の問題」であるとして学生側の要求を退けている。

『東京学芸大学五十年史』でも描かれているように、一九七六年から翌年にかけては、「特殊教育学科研究棟新営に伴うサークル部室の移転」問題に端を発する「養護学校と義務制問題」をめぐる学生側と大学との激しい対立があった。特殊教育学科研究棟建設に反対する学生たちは、それが養護学校の一九七九年度義務制移行と連動しているため認められないと主張したのである。このように問題は新たな展開を見せながら、全学的な拡がりをみせていった。

またこの時期は、学生寮問題をめぐる対立も起きた。一九七九年度入学者選抜共通一次試験の実施に伴い、本学では二次試験を実施しない学科があり、入学試験日に希望者全員に行っていた学寮案内や説明会などが二次試験を受けない受験生に対して実施できなくなった。当時、本学には雄滝寮、大泉寮、若竹寮、小平寮の四つの学寮があったが、大学側は四寮生と同時に話し合うこと



写真V-3 「東学大闘争」は可能か?』『東京学芸大学新聞』(1979年3月、161号)

を方針として示した。大泉、若竹、小平の三寮生とは合意が成立したが、雄迪寮生たちは、寮生作成のパンフレットを公文書と同封することと団交を要求し続け、大学側との徹夜の交渉が行われた。その後、雄迪寮生たちは大学の方針を不満として二日間にわたる座り込みで抵抗を続けた。

4 教員養成系大学としての教育・研究機関の整備

専攻科

東京学芸大学に教員養成系大学で初めての大学院修士課程が設置されたのは、一九六六（昭和四一）年であるが、それ以前には、学部卒業後の継続教育機関として専攻科が設置されていた。この専攻科は、一九五四年四月に学芸専攻科として世田谷分校におかれ、修業年限は一年であった。学芸専攻科の目的は、「本学は、教養の高い専門的学芸に秀でた教員の養成を目的とする大学」であり、「本学の使命から特に教職課程及び芸能体育課程の科目については、精深な程度において、特別の専門技能を教授し、一層有為なる教育者の養成」を期すことである（東京学芸大学専攻科設置要項「一九五四」とされていた。なお、設置申請の段階では「教職課程」と「芸能体育課程」であったが、保健体育が見送りになり、最終的に「教育専攻」、「芸術・書道専攻」（それぞれ定員一〇名）となった。教育内容は、教育専攻が教育学、教育心理学、教科教育学、芸術・書道専攻が音楽、美術・工芸、書道である。一九六〇年には保健体育

専攻が増設された。また同年、臨時養護学校教員養成課程も設置され、一九六九年に、芸術・書道専攻を、音楽専攻、美術・工芸専攻、書道専攻の三つに改組した。

一九六六年の学芸学部から教育学部への学部名称変更により、専攻科は教育専攻科へ改称した。そして同年の修士課程（東京学芸大学大学院教育学研究科）の設置により段階的にその役割を終えていくこととなる。まずは教育専攻が、続いて一九七六年に音楽、美術・工芸および保健体育の専攻科がそれぞれ廃止され、残る書道専攻も一九八八年に廃止となった。

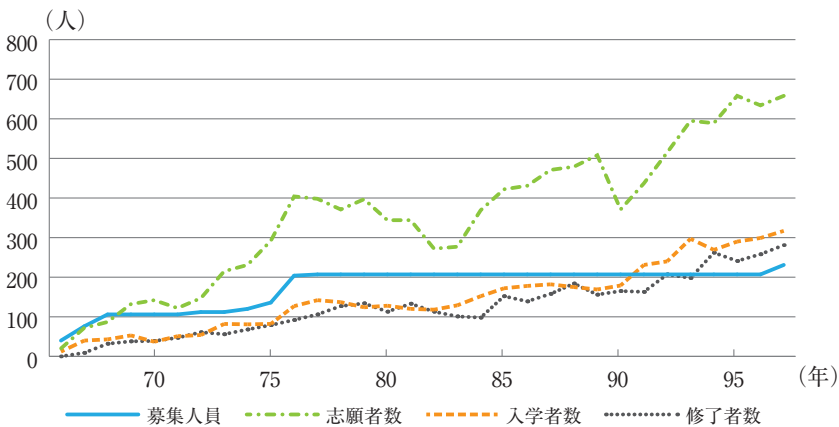
一方、一九七三年には、他の教員養成系大学に先駆けて、特殊教育特別専攻科（精神薄弱教育専攻）が設置された。これは、養護学校教育への社会的要求の高まりと養護学校教員補充の必要性から、「精深な程度において特殊教育に関する専門の事項を教授し、特殊教育の分野における資質の優れた教育者を養成すること」を目的とし、修業年限は一年で入学定員は三〇人、現職教員と小・中・高等学校、幼稚園のいずれかの普通免許状を有する者を対象としたものであった。設置から数年間は必ずしも定員に満たない状態が続いたが、一九七九年に養護学校教育が義務化されると、徐々に志願者数も増え、一九八〇年代以降は二倍近くの倍率となる年もあった。二〇〇七年に特別支援教育特別専攻科に改称され、現在に続いている。

大学院修士課程 設置の経緯

本学における大学院修士課程設置の動きは、一九六四年一月の教授会における高坂正顕学長（当時）

による所信表明およびそれに続く七月の学長提議「大学院設置要請の理由」に端を発している。この提議のもと大学院概算要求検討委員会が設置され、検討が開始され、文部省に一九六五年度概算要求を提出したが、教員養成系大学独自の大学院についてこの時点で法的規定がなく実現の可能性がないということでのこの年は受け入れられなかった。しかし時をおかず九月に改めて大学院検討委員会が発足し、具体的な内容（全学的視野のもとに教育者養成に関する基礎的研究を行うこと、高等学校一級普通免許状への道を開くこと、教育修士課程が妥当であることなど）が検討された。同年一二月に大学院設置準備委員会を設置し、具体案が作成され、一九六六年度の概算要求案が作成された。

大学院設置審議会では、本学での大学院設置要求に対し、教員養成系大学における研究科設置の precedents がなく設置基準も設けられていないため、新たに特別委員会を設け議論を行った。設置にあたり、文部省から設置審議会の意見という名目にくつつかの留意事項が付された。そこには、「義務教育諸学校に関する研究を主として行なうよう配慮すること」や「現職教



図V-1 大学院修士課程 入学・修了人数の推移

員にも入学の機会が与えられるようじゅうぶん配慮すること」、「国語教育専攻および社会科教育専攻をなるべくすみやかに設置するよう努力すること」などが添えられた（東京学芸大学大学院の設置について（通知）」一九六六年四月一八日付）。留意事項はあつたものの、一九六六年四月一八日付文部省大学學術局長による「東京学芸大学大学院の設置について（通知）」を以て、東京学芸大学大学院教育学研究科が設置された。教員養成系大学で初めての大学院であった。

大学院修士課程 設置時の修士課程の内容

本学大学院修士課程の正式な名称は「東京学芸大学大学院教育学研究科」であり、一九六六年時点の専攻の構成は学校教育専攻、数学教育専攻（それぞれ定員八人）、理科教育専攻（定員一八人）、英語教育専攻（定員六人）で、取得学位は「教育学修士」であった。「昭和四一年度（新設）東京学芸大学大学院教育学研究科（修士課程）学生募集要項」によると、大学院の目的は「学部における一般的ならびに専門的教養の基礎のうえに広い視野に立つて精深な学識を修め、理論と応用の研究能力および教育実践の場における教育研究の推進者となる能力を養うこと」である。設置後の変遷については、表V-3「大学院教育学研究科の変遷」を参照されたい。設置の翌年の一九六七年には国語教育専攻、社会科教育専攻、音楽教育専攻の三つが新たに加わり、漸次専攻数が増えていった。二〇〇八年には夜間大学院および教職大学院も含め、一六の専攻をもつに至った。初年度である一九六六年の入学者選抜は四月一八日に行われ、全専攻合わせて定員四〇人に対し、志願者数二〇人、合格者数一二人と定員割れの状況であった

表V-3 大学院教育学研究科の変遷

年	1966年	1967年	1968年	1974年	1975年
専攻数	4	7	10	11	12
専攻名	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻 障害児教育専攻	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻 障害児教育専攻 技術教育専攻

年	1997年	2005年	2008年	2019年
専攻数	13	15	16	3
専攻名	学校教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻 障害児教育専攻 技術教育専攻 総合教育開発専攻 ^{*1}	学校教育専攻 学校心理専攻 特別支援教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻 技術教育専攻 養護教育専攻 総合教育開発専攻 ^{*1}	学校教育専攻 学校心理専攻 特別支援教育専攻 数学教育専攻 理科教育専攻 英語教育専攻 国語教育専攻 社会科教育専攻 音楽教育専攻 美術教育専攻 保健体育教育専攻 家政教育専攻 技術教育専攻 養護教育専攻 総合教育開発専攻 ^{*1} 教育実践創成専攻 ^{*2}	次世代日本型教育システム研究開発専攻 教育支援協働実践開発専攻 教育実践専門職高度化専攻 ^{*2}

※1 夜間大学院 ※2 教職大学院

が、専攻数の増加・拡大および多様化により、徐々に志願者数も増えていき、一九七〇年代半ばには二〇七人の定員に対し、四〇〇人以上の志願者数となる年もあった。

施設・センターの設置

二〇二三年現在、東京学芸大学には、四つの機構（大学教育研究基盤センター機構、現職教員支援センター機構、先端教育人材育成推進機構、教育インキュベーション推進機構）と二つの施設（放射性同位元素総合実験施設、有害廃棄物処理施設）および附属図書館が附設されており、各機構には複数の教育研究機関としてのセンター等が組織化されている。

一九六〇～八〇年代にかけて、教育・研究機関としてのセンターや施設が、教育学部附属施設・センター、大学附置省令施設、学内施設として設置された。その一部は現在のセンター等に連なるものである。施設・センター等の設置状況については、次ページに図V-4「施設・センター変遷一覧」を挙げたが、ここでは一九六〇年代から八〇年代に設置されたものについて、いくつか特徴的なものを紹介する。

附属言語指導研究施設・附属特殊教育研究施設

東京学芸大学のセンター・施設の中で、最も早く設置されたのは、「附属言語指導研究施設」（一九六三年設置、教育学部附属省令施設）である。これは、一九六三年一〇月に聴覚と言語に障がいのある児童

2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008	2007	2006	2005	2004	2003	2002	2001	2000	1999	1998	1997	1996	1995	1994	1993	1992	1991	1990	1989	1988	1987	1986	1985	1984	1983	1982	1981	1980	1979	1978	1977	1976	1975	1974	1973	1972	1971	1970	1969	1968	1967	1966	1965	1964	1963	1962	1961	1960	1959	1958	1957	1956	1955	1954	1953	1952	1951	1950	1949	1948	1947	1946	1945	1944	1943	1942	1941	1940	1939	1938	1937	1936	1935	1934	1933	1932	1931	1930	1929	1928	1927	1926	1925	1924	1923	1922	1921	1920	1919	1918	1917	1916	1915	1914	1913	1912	1911	1910	1909	1908	1907	1906	1905	1904	1903	1902	1901	1900	1899	1898	1897	1896	1895	1894	1893	1892	1891	1890	1889	1888	1887	1886	1885	1884	1883	1882	1881	1880	1879	1878	1877	1876	1875	1874	1873	1872	1871	1870	1869	1868	1867	1866	1865	1864	1863	1862	1861	1860	1859	1858	1857	1856	1855	1854	1853	1852	1851	1850	1849	1848	1847	1846	1845	1844	1843	1842	1841	1840	1839	1838	1837	1836	1835	1834	1833	1832	1831	1830	1829	1828	1827	1826	1825	1824	1823	1822	1821	1820	1819	1818	1817	1816	1815	1814	1813	1812	1811	1810	1809	1808	1807	1806	1805	1804	1803	1802	1801	1800	1799	1798	1797	1796	1795	1794	1793	1792	1791	1790	1789	1788	1787	1786	1785	1784	1783	1782	1781	1780	1779	1778	1777	1776	1775	1774	1773	1772	1771	1770	1769	1768	1767	1766	1765	1764	1763	1762	1761	1760	1759	1758	1757	1756	1755	1754	1753	1752	1751	1750	1749	1748	1747	1746	1745	1744	1743	1742	1741	1740	1739	1738	1737	1736	1735	1734	1733	1732	1731	1730	1729	1728	1727	1726	1725	1724	1723	1722	1721	1720	1719	1718	1717	1716	1715	1714	1713	1712	1711	1710	1709	1708	1707	1706	1705	1704	1703	1702	1701	1700	1699	1698	1697	1696	1695	1694	1693	1692	1691	1690	1689	1688	1687	1686	1685	1684	1683	1682	1681	1680	1679	1678	1677	1676	1675	1674	1673	1672	1671	1670	1669	1668	1667	1666	1665	1664	1663	1662	1661	1660	1659	1658	1657	1656	1655	1654	1653	1652	1651	1650	1649	1648	1647	1646	1645	1644	1643	1642	1641	1640	1639	1638	1637	1636	1635	1634	1633	1632	1631	1630	1629	1628	1627	1626	1625	1624	1623	1622	1621	1620	1619	1618	1617	1616	1615	1614	1613	1612	1611	1610	1609	1608	1607	1606	1605	1604	1603	1602	1601	1600	1599	1598	1597	1596	1595	1594	1593	1592	1591	1590	1589	1588	1587	1586	1585	1584	1583	1582	1581	1580	1579	1578	1577	1576	1575	1574	1573	1572	1571	1570	1569	1568	1567	1566	1565	1564	1563	1562	1561	1560	1559	1558	1557	1556	1555	1554	1553	1552	1551	1550	1549	1548	1547	1546	1545	1544	1543	1542	1541	1540	1539	1538	1537	1536	1535	1534	1533	1532	1531	1530	1529	1528	1527	1526	1525	1524	1523	1522	1521	1520	1519	1518	1517	1516	1515	1514	1513	1512	1511	1510	1509	1508	1507	1506	1505	1504	1503	1502	1501	1500	1499	1498	1497	1496	1495	1494	1493	1492	1491	1490	1489	1488	1487	1486	1485	1484	1483	1482	1481	1480	1479	1478	1477	1476	1475	1474	1473	1472	1471	1470	1469	1468	1467	1466	1465	1464	1463	1462	1461	1460	1459	1458	1457	1456	1455	1454	1453	1452	1451	1450	1449	1448	1447	1446	1445	1444	1443	1442	1441	1440	1439	1438	1437	1436	1435	1434	1433	1432	1431	1430	1429	1428	1427	1426	1425	1424	1423	1422	1421	1420	1419	1418	1417	1416	1415	1414	1413	1412	1411	1410	1409	1408	1407	1406	1405	1404	1403	1402	1401	1400	1399	1398	1397	1396	1395	1394	1393	1392	1391	1390	1389	1388	1387	1386	1385	1384	1383	1382	1381	1380	1379	1378	1377	1376	1375	1374	1373	1372	1371	1370	1369	1368	1367	1366	1365	1364	1363	1362	1361	1360	1359	1358	1357	1356	1355	1354	1353	1352	1351	1350	1349	1348	1347	1346	1345	1344	1343	1342	1341	1340	1339	1338	1337	1336	1335	1334	1333	1332	1331	1330	1329	1328	1327	1326	1325	1324	1323	1322	1321	1320	1319	1318	1317	1316	1315	1314	1313	1312	1311	1310	1309	1308	1307	1306	1305	1304	1303	1302	1301	1300	1299	1298	1297	1296	1295	1294	1293	1292	1291	1290	1289	1288	1287	1286	1285	1284	1283	1282	1281	1280	1279	1278	1277	1276	1275	1274	1273	1272	1271	1270	1269	1268	1267	1266	1265	1264	1263	1262	1261	1260	1259	1258	1257	1256	1255	1254	1253	1252	1251	1250	1249	1248	1247	1246	1245	1244	1243	1242	1241	1240	1239	1238	1237	1236	1235	1234	1233	1232	1231	1230	1229	1228	1227	1226	1225	1224	1223	1222	1221	1220	1219	1218	1217	1216	1215	1214	1213	1212	1211	1210	1209	1208	1207	1206	1205	1204	1203	1202	1201	1200	1199	1198	1197	1196	1195	1194	1193	1192	1191	1190	1189	1188	1187	1186	1185	1184	1183	1182	1181	1180	1179	1178	1177	1176	1175	1174	1173	1172	1171	1170	1169	1168	1167	1166	1165	1164	1163	1162	1161	1160	1159	1158	1157	1156	1155	1154	1153	1152	1151	1150	1149	1148	1147	1146	1145	1144	1143	1142	1141	1140	1139	1138	1137	1136	1135	1134	1133	1132	1131	1130	1129	1128	1127	1126	1125	1124	1123	1122	1121	1120	1119	1118	1117	1116	1115	1114	1113	1112	1111	1110	1109	1108	1107	1106	1105	1104	1103	1102	1101	1100	1099	1098	1097	1096	1095	1094	1093	1092	1091	1090	1089	1088	1087	1086	1085	1084	1083	1082	1081	1080	1079	1078	1077	1076	1075	1074	1073	1072	1071	1070	1069	1068	1067	1066	1065	1064	1063	1062	1061	1060	1059	1058	1057	1056	1055	1054	1053	1052	1051	1050	1049	1048	1047	1046	1045	1044	1043	1042	1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021	1020	1019	1018	1017	1016	1015	1014	1013	1012	1011	1010	1009	1008	1007	1006	1005	1004	1003	1002	1001	1000	999	998	997	996	995	994	993	992	991	990	989	988	987	986	985	984	983	982	981	980	979	978	977	976	975	974	973	972	971	970	969	968	967	966	965	964	963	962	961	960	959	958	957	956	955	954	953	952	951	950	949	948	947	946	945	944	943	942	941	940	939	938	937	936	935	934	933	932	931	930	929	928	927	926	925	924	923	922	921	920	919	918	917	916	915	914	913	912	911	910	909	908	907	906	905	904	903	902	901	900	899	898	897	896	895	894	893	892	891	890	889	888	887	886	885	884	883	882	881	880	879	878	877	876	875	874	873	872	871	870	869	868	867	866	865	864	863	862	861	860	859	858	857	856	855	854	853	852	851	850	849	848	847	846	845	844	843	842	841	840	839	838	837	836	835	834	833	832	831	830	829	828	827	826	825	824	823	822	821	820	819	818	817	816	815	814	813	812	811	810	809	808	807	806	805	804	803	802	801	800	799	798	797	796	795	794	793	792	791	790	789	788	787	786	785	784	783	782	781	780	779	778	777	776	775	774	773	772	771	770	769	768	767	766
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

の治療教育の理論・方法論の基礎研究のために設置され、研究部門の拡張に伴い一九六七年に特殊教育研究施設と改称した。本学では、一九五三年に二年課程の聾学校教員養成課程（一九五五年廃止）、一九六〇年に特殊教育教員養成課程、臨時養護学校教員養成課程（一九七三年廃止）、一九六九年に臨時肢体不自由児教育教員養成課程（一九七三年廃止）、一九七三年に臨時情緒障害児教育教員養成課程（一九八三年廃止）が設置され、同年には特殊教育特別専攻科、翌一九七四年には大学院修士課程に障害児教育専攻が設置されたが、この施設の開設も本学における特別支援教育の拡充・展開の中に位置づくものである。二〇〇四年には附属教育実践総合センターと統合して教育実践研究支援センターに、二〇一九年には特別支援教育・教育臨床サポートセンターとなり、現在に至る。

附属野外教育実習施設

附属野外教育実習施設は、「野外における環境教育及びそれに関する基礎分野の教育・研究を行うとともに、学生等の実習・実験の場として利用に供し、環境教育の推進を図ることを目的」として、一九八七年に設置された施設である。もともと前身校の各師範学校はそれぞれ農場を有していたが、東京学芸大学に統合されるにあたり、その管理を職業科の農学講座が担うこととなり、その土地の特質を生かした運営（例えば第二師範学校農場では水田、第三師範学校農場では畑など）が行われていた。各分校の統合に伴い、各地にあった農場は順次整理・廃止され、一九五四年に小金井キャンパス内に小金井農場が設置され、一九八七年にこれを改組し、附属野外教育実習施設となった。『東京学芸大学五十年史』

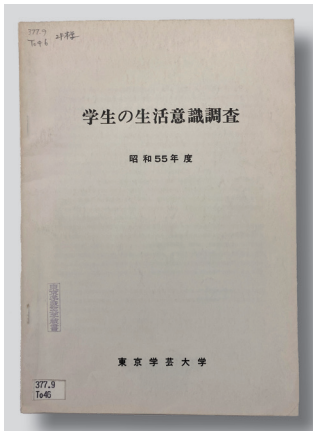
(二九九九)によると、この施設が設置された背景には、臨時教育審議会答申における子どもたちの自然学習体験の重要性の指摘と国際的な地球環境問題への意識の高まりがあったとしている。

附属野外教育実習施設は、一九九四年に事業内容を拡大して環境教育実践施設となり、二〇一一年には環境教育研究センターと改称し、現在も環境教育の内容・方法などに関する研究・普及を目的に、学内での教育研究のみならず、地域や学校と連携して環境教育に関するプロジェクトなどを行っている。

5 共通一次試験の導入と多様化する学生生活

共通一次試験の導入と学生意識の変化

イラン革命に端を発した第二次オイルショックに見舞われ、経済的な混乱状況にあった一九七九(昭和五四)年、大学入試改革の一環として国公立大学に共通第一次学力試験(以下、共通一次)が導入、実施された。現在の大学入試共通テストの前身にあたるこの試験は、国公立大学の入学志願者に対し、高等学校の段階における基礎的な学習の達成程度を問う良質な問題を確保し、各大学がそれぞれの



写真V-4 『学生生活意識調査 昭和55年度』

学、学部で行う第二次試験との組合せによって、一発勝負の学力試験に偏った従来の方法を改め、丁寧な入試の実現をめざすものであった。

しかし、受験生にとって大きかったのは、五教科七科目という重い負担と不慣れなマークシートでの解答という点だけでなく、それまで三〇年間続いてきた国立大学のⅠ期・Ⅱ期の期別入試が廃止され、二回あった受験機会が一回になったことであった。賛否両論さまざまな意見が飛び交うなか、Ⅱ期入試に属し、いわゆる「二期校」として位置づけられていた東京学芸大学では、共通一次が導入され、国立大学の受験が一校に制限され入学してきた学生の意識や就職観などにどのような変化が生じるのかという点に関心が寄せられていた。学生部が行った一九八〇年度の『学生の生活意識調査』（写真V-4）で学生部長・小林文人は、仮説と断ったうえで、本学には「でもしか教師」的な学生よりも、かなり明確な目的志向を持って教職を志す学生が増えたのではないか、共通一次はそのような効果を東京学芸大学にもたらしたのではないかと指摘している。共通一次の導入で「二期校」意識が消え、学生がより主体的な国立大学の受験校選択を行ったことで、明確な教員志望をもつ学生を増やしたのではないかという見解である。『新入学生に関する調査 昭和五十四年度』では、本学を第一志望で入学した学生の職業志望順位の第一位は「教育者」であり、回答者九七七人の八〇・二%を占めている。これは同じ調査の昭和五一年度データの四七・九%に比べて大幅な伸びとなっており、小林学生部長の見解を裏付ける結果となっている。

教員就職難と学生への影響

しかし、この時期、私立大学が小学校教員養成に積極的に乗りだしたことなどを背景に、本学卒業生の教員就職率は厳しさを増していく。一九七八年二月に発行された大学広報誌『東学大キャンパス通信』第六三号は、本学学生の東京都教員採用試験合格者数の激減を伝えている。一九八〇年四月のデータを見ると、都採用試験（小学校全科）本学合格者四二一名のうち一二〇名が結果的に不採用になっている。同誌は、教員養成大学として全国一の規模を誇る本学にとって、まさに「大学始まって以来の危機」であると報じているが、入学生の意識と矛盾する教員就職の深刻な事態に直面することになった。

一九八〇年一月に発行された『東学大キャンパス通信』第七一号では、東京都公立学校で一九八四年には十万人以上の児童が減り、それに伴い教員採用数も減少すると推測している。この状況に呼応して東京都が一九八二年度教員採用試験から導入したのが、合格者を成績順に事実上の内定を意味する「A合格」と欠員補充者を意味する「B合格」に分ける制度である。この制度の導入には、教員の採用確定時期が遅いことで成績上位の合格者が、私学や民間企業に流れる事態に歯止めをかける意図があった。

しかし、東京都の公立学校で教員として働く夢をもって試験を受験した本学学生にとっては、たとえ「合格」を勝ち取っても、「B合格」であれば三月末まで採用されるかどうか分からない不安な状況が続くことになる。大学側もこの状況を問題視し、本学の創立理念である「有為の教育者」を輩出するという目標に基づき、教員だけではなく、社会教育主事や図書館司書、博物館学芸員などの社会教育専門職、教育関連公務員や企業などへの本学卒業生の進出を志向していった。これらの動きは、その後設置

される教養系や、現在の教育支援系につながる契機になった。

出身地域の多様化と女子学生の減少傾向

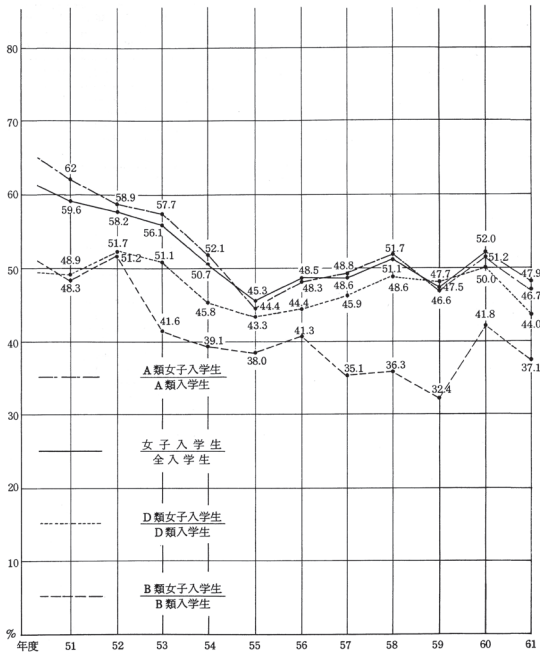
共通一次が本学にもたらした影響は他にもある。その一つが、新入生の出身地域がさらに多様化し、以前にも増して全国各地から学生が入学するようになったことである。

『新入学生に関する調査 昭和六一年度』から全学生の出身地域を見ると、一九七七年度のトップは東京地区の五一・四％であるものの、翌年には減少に転じ、共通一次が導入された一九七九年度の東京地区出身者は五割を切る四六・七％となった。その後一九八〇年度は四三・六％、一九八一年度も四二・三％と減り続け、一九八三年度には三六・〇％と四割を切る状況になっている。

一九八三年のデータでは東京を除く関東地区が二五・三％で、以下、中部地区が一三・五％、関西・近畿・中国地区が七・四％と続き、沖縄を含む全国各地から学生が入学している。

共通一次については「大学の序列化を不当に招いている」、「受験地獄を悪化させている」という厳しい批判も多かった。しかし、国公立大学の受験先を一本化せざるをえなくなった高校生たちにとっては、より志望動機や目的意識を明確化するよう求められるようになったことも事実である。先の小林文人生部長の指摘や全国から多くの学生が集まる全国型教員養成大学への明確な変化が生じたのもこの点と無縁ではない。

本学の受験動機については、首都東京に立地する伝統ある教員養成大学であるという点、単科大学で



図V-2 女子学生入学者年度別推移
 (『新入学生に関する調査 昭和61年度』より転載)

あるにもかかわらず一二〇〇名を超える入学定員を誇り、多様な選修・専攻と取得可能な教員免許状を多く有しているという点、私大に比べ学費負担がかなり軽い(一九七九年度新入生授業料は半期七万四千円)点などが要因として考えられる。しかし、全国の高校生たちから受験先として選択されていたのは、教育界から本学が教員養成大学のトップ校として評価されてきたことも要因であろう。全国各地の教育現場で活躍する卒業生たちがその評価を築き上げてきたのである。

この時期に明確になってきた現象の一つに、女子入学生比率の低下がある。図V-2は『新入学生に関する調査 昭和六一年度』に掲載されている女子入学生比率に関するグラフである。このようなデータがあることから、大学がこの点にかなり関心を寄せていたことを窺い知ることができ、グラフにあるように、女子学生入学者は共通一次導入二年目の一九八〇年に五割を切り、四五・三%になっていく。その後、五〇%前後を推移するが、一九八六年には四七・九%になっている。この年の傾向を見ると、A類・B類・D類を通じ

社会・数学・理科・保健体育では男性が多く、A類国語、A・B類音楽、A・B類美術・家庭、A類学校教育、C類特殊教育、D類書道では女性の新生が多い。特にE類幼稚園は、入学者全員が女性であった。女子入学生が一九七六年度の六二%から一〇年後の一九八六年度に四六・七%まで減少していることを考えると、この時期の男女比率の変化には興味深いものがある。

多様化する学生の志向性

一九八四年度の『学生の生活意識調査―昭和五五年度入学者の四年間』は、教育問題が社会的に注目される中で教員の資質向上が叫ばれながらも、教員就職が極めて厳しいという状況下で刊行された調査報告書である。さまざまな志を抱いて本学に入学してきた学生がどのような学生生活を送っていったのか、教育実習をどのように受け止め、教職観や教員志望が形成されたのか、社会に対してどのような展望や希望を抱いているのかという問題関心をもって四年生一〇五名に対して教員が面接調査を行っている。

編集責任者であった学生部長・竹内誠は、調査の結果、教員への強い志向性をもつ真面目で勉強熱心な教育学部生といったステレオタイプには収まりきらない、多様な本学学生の姿が浮き彫りになったと指摘し、報告書では一〇に分類される「学芸大生のタイプ」を挙げている。

①一貫性があり、強い教職志望をもつタイプ、②子ども理解を深めながら教職を強く志向していく学生、③サークル活動中心から専攻する学科の勉強へ向かうタイプ、④専門志向から教職志向へ向かうタ

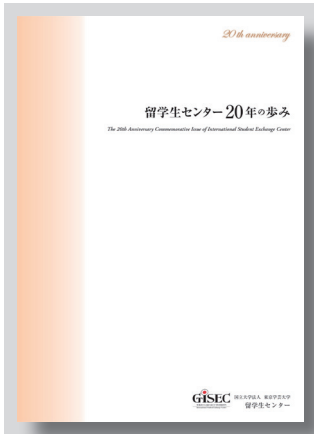
イブ、⑤自分の好きな活動や趣味・読書などをやりきる「生きがい追求型」のタイプ、⑥専門分野を学びたくて他大学を受験しなかったが親に反対されやむなく受験し入学したため、教員志向がほとんどない「非教職一貫型」のタイプ、⑦いったんは教職を目標にしていたが、勉強を進め、教育実習などを経験する中で自分が教職に不向きであると考え、教員就職に消極的になり教職を回避していくタイプ、⑧共通一次の結果のみで入学せざるをえなかったことで消極的な学生生活を送るタイプ、⑨勉強よりもサークル・交友を中心とするタイプ、⑩学業以外でやりたいと思ったことをやるマルチ経験タイプの一〇のタイプである。調査報告書では、①に分類される学生がこれまでの学芸大を支えてきたタイプの学生であるものの、意外なことに少数であったと指摘している。

もちろん、青年期にあつて個性豊かな学生の意見には多種多様なものがあり、家庭や友人など周囲の影響を色濃く受けている。しかし、それらは、単科大学とは思えない専門領域の多様さや盛んな自主ゼミ、^(注)部活動やサークル活動、学生寮生活やアルバイトなど、大学生になって初めて経験するさまざまな活動に裏づけられているように思える。大学での学びや教育実習、サークル活動などの交友関係を通して得られた喜びもあるだろう。時には挫折もあるだろう。しかしながら、報告書に掲載された学生の声に耳を傾けてみると、多様化してはいるが、教育や教職を軸に自らが進む道を見つけようと悩み、学び、考えを深めていく学生の姿が垣間見える。

(注) 自主ゼミとは、正規科目以外に学生が自主的に教員とともに運営する本学特有のゼミ。

留学生の増加と大学の国際化

小金井キャンパスで学ぶ留学生の姿。今ではごく一般的な光景であるが、本学が外国人留学生を初めて受け入れたのが一九七一年、ようやく一〇人を超えたのが一九八一年のことであった。国の支援もあり、一九八〇年代から九〇年代にかけて本学は国際化していき、一九八七年には一三六人の留学生を受け入れている。現在では、アジアを中心に二〇か国以上の国や地域から多数の留学生が本学で学んでいる。増加し続ける留学生に対して、一九八六年に学生課に留学生係が設置され、一九九三年には小金井キャンパス東門付近に国際交流会館（留学生用宿舎）が整備された。同年、「留学生教育研究センター」も設立され、留学生が三〇〇人を超えた一九九八年には、学内措置で設置されていた同センターは、省令施設としての「留学生センター」に格上げされ、二〇一九年には設立二〇周年を迎えた（写真V-5）。留学生係も留学生課へと改組され、組織や施設の面でも留学生を支える体制が整備された。このように



写真V-5 『留学生センター
20年の歩み』（2019年）

一九八〇年代から九〇年代は、国の「留学生一〇万人計画」推進を背景に本学のキャンパス風景が国際色豊かになっていく時期であった。キャンパス内では留学生との交流も盛んに行われ、一般学生と留学生とがともに学ぶ「多文化共修科目」などカリキュラム上の工夫もなされたが、それを支える事務職や教員たちの苦勞も大きかった。ともするとドメスティックになりがちともいわれたい

た教員養成大学であるが、留學生の増加を見るこの時期を境に、グローバル化の影響による学校現場の国際的多样化、留學生教育をめぐるさまざまな課題等もあり、本学の教育活動そのものの国際化も進展した。

現在、教員養成大学として国内有数の交流協定大学数をもつ本学であるが、一般學生の海外大学への留学が増え始めたのもこの時期である。

小金井祭に見る一九八〇年のキャンパス風景

写真V-6は一九八〇年一月に行われた第二八回小金井祭のパンフレットである。当時は一月下旬に開催されていたが、現在のように文化の日を中心に開催されるようになったのは一九九二年からである。学生組織である小金井祭実行委員会は、「ルネッサンス'80 新たな歴史の扉をたたけ」というテーマを掲げ、「若者文化の復興」「現在の教育に対して、自ら未来を切り拓いてゆく意欲を持って対していく」「私たち自身の歴史は私達自身で創りあげていく」というスローガンを掲げていた。他大学同様、模擬店を中心に運営されていることが学内でかなり問題視されていたこともこれらの背景にあらう。

パンフレットを見ると、サークルや自主ゼミ、研究室主



写真V-6 第28回小金井祭
パンフレット(1980年)

催の研究発表会や演奏会、催し物などがたくさん企画され、内容面でのクオリティを変えていこう、高めていこうとする学生側の苦心も伝わってくる。また、この時期の大学祭らしく、政治的な主張を込めた平和・教育に関する取り組みも見られる。

本部企画「教員養成のゆくえを探る―今、開放制の原則を問う―」や、歴史学者・羽仁五郎による戦後教員養成制度に関する講演会など、本学のメインミッションである教員養成の根本思想やそれを支える教育内容、教育実習などを問い直そうとする本学学生ならではの意欲的な内容も少なくなかった。

その他、著名な研究者や評論家を招いての「非行問題」「文化人の戦争責任」「障害を持つ子どもの教育」「養護学校の本質」「結婚」「地域と大学」などをテーマとする講演会、教育系・文科系サークルによる展示会や研究発表会なども数多く開催されている。また、シンガーソングライターや田久保裕一（本学OB）など著名な指揮者を招いてのコンサート、軽音楽部などハイレベルな音楽系サークルによる演奏会、演劇、ファイアー・ダンスパーティなども開催され、美術・書道科学生による作品展覧会にも多くの観客が来場した。本学の特色でもある活発な自主ゼミ活動や研究室における研究活動、多様なサークル活動、何よりも学生の熱意が、従来型の模擬店中心の小金井祭のあり方を少しずつ変えつつあった。

小金井祭は、小金井市長や地域住民からも大きな期待が寄せられる地域密着型ともいうべき大学祭である。市内パレードも行われ、小金井市民にとっても大きな楽しみになっていた。

しかし、何と云っても、小金井祭最大の特徴は地域や附属学校園の子どもたちが多数来場するという点にある。附属学校や協力校に教育実習に行った学生が担当した子どもたちが多数来場し、ともに楽し

む姿が見られるのは本学ならではのものであった。鉄道研究部の鉄道模型ジオラマ展示、「絵本サークルきつねのしっぽ」、子どもと遊ぶサークル「麦の子」の展示には連日多くの子どもたちが来場し、学生との交流を深めた。

小金井祭名物であった「子どもの広場」が資料のうえで最初に確認されるのは一九七二年に開催された第

二〇回小金井祭からである。この年も本部企画として教育系サークル「麦の子」や「セツルメント」などが協力して創る「子どもの広場」が開催されている(写真V-7)。

案内には、「これは、わが大学の特色を生かした本部企画の一つです。子どもが、一日楽しく遊べる広場をめざすとともに、学生や大人のみなさんに、子どもと一緒に遊ぶことによって、子どもについて考えを深めるきっかけになったらと思います」と書かれている。それは、子どもたちとの遊び場づくりを通して教育の本質を学ぼうとする学生たちが創るキャンパス風景であった。

盛んなサークル活動と運動部の活躍

本学のサークル活動は多種多様であることで知られている。一九八〇年代の小金井キャンパスには、現在の環境教育研究センター付近から東に向けて延びる旧陸軍技術研究所時代の古びた木造の建物が



写真V-7 第28回小金井祭パンフレットに掲載された「子どもの広場」の案内

あった。通称「サークル長屋」と言われたこの建物には、サークル活動のための部室、学生自治会などの部屋がびっしり連なり、学生たちの居場所になっていた。この「サークル長屋」が、現在のサークル棟（課外活動共用施設）の前身である。先に紹介したサークルの他にも、東京学芸大学新聞会、多摩地域に足跡を残す研究活動を展開した「考古学研究部」や「民俗学研究会」、教育関係では「へき地教育研究会」や子ども向けの人形劇サークル「麦笛」、児童文学サークル「あかべこ」などが独自性あふれる活動を展開していた。音楽系サークルでは、一九八六年に日本を代表するポップ・インストウルメンタル・バンドTHE SQUARE（現T-SQUARE）にベーシストとして加入する須藤満が軽音楽部から出ている。

この時期の体育系サークルでは、一九八四年に陸上競技部が「箱根駅伝」に出場する活躍をみせるが、特筆すべきは硬式野球部から本学初のプロ野球選手が出たことであろう。一九八四年にA類保健体育選修を卒業した栗山英樹（元、野球日本代表WBC優勝監督）は、ヤクルトスワローズに入団、その後レギュラー選手となり好守好打の大活躍を見せ、引退後はスポーツキャスターを経て北海道日本ハムファイターズの監督としてチームを日本一に導くなど、国立大学初のプロ野球球団監督として輝かしい実績を残した。小金井キャンパスの野球場には彼の功績を称える顕彰碑が建てられている。

6 一九八〇年代から九〇年代の附属学校園と教育研究活動

課題に直面する附属学校園

ここでは、一九八〇年代前後から九〇年代前半にかけての附属学校園の動向について、教育研究活動を中心にみていくこととする。この時期の教育界に大きな影響を与えたのが中曽根康弘首相主導のもとに一九八四（昭和五九）年に設置された臨時教育審議会（臨教審）である。臨教審は、生涯教育の考え方を含む教育体系の総合的再編成や教育の国際化を主張し、教員養成や免許制度、現職教員研修の改善なども提言するなど、その内容は附属学校園にも影響を与えた。また、この時期は、教員就職難や教養系設置の影響もあり、教職が第一志望ではない教育実習生の対応にも附属学校園は苦労を重ねていた。

東京学芸大学附属養護学校（現在の附属特別支援学校）教諭の沼崎徹は、創立四〇周年を記念して刊行された『若竹四十年』（一九九四）に「本校の存在意義、今後のあり方等」という論考を寄せている。その中で沼崎は、「今、附属学校の意義が問われている。附属学校は本来、大学の教育研究に資し、日本の教育の向上を図るために設置されたものであるが、大学との共同研究、連携が希薄となり、附属としての役割を果たさなくなってきたことが、大きな理由と思われる」と危機感をあらわに述べている。附属学校は教育政策の大転換の中で存在意義を問われる変革期にあった。しかしこれは附属学校側だけの課題ではない。大学教員の附属学校、教育実習への関心の薄さや、学生指導のあり方など、大学側の

課題も少なくなかった。

附属高等学校と国際化時代への対応

この時期には附属国際中等教育学校（二〇〇七年創立）はまだ設立されていない。しかし、その母体となる東京学芸大学教育学部附属高等学校大泉校舎（一九七四年創立）が、高等学校段階の「帰国子女教育」の実験校として国内における先駆的な役割を果たしていた。

附属高等学校は、一九五四年、中学校と高等学校との接続教育を実践的に研究する学校として世田谷区に設立された。当初より固定観念にとられず受験本位の指導を行わない「自由な校風」とともに国内有数の進学校としてもよく知られていたが、附属高校の特色はそれだけではない。現在も重視されている「探求的な学び」を重んじる教育を率先して実践し、教科以外の多種多様な学校行事・課外活動を展開していることも大きな特色であった。

また、教育実習を通して高校教員をめざす学部学生教育の他、高校における教育内容・方法の改善に関する実践研究を行い、大泉校舎の設立に続き、一九七六年からは「帰国子女」の受け入れなど国際化時代に対応した教育を率先して行っていた。

附属中学校の教育研究活動

この時期の附属中学校は、世田谷、小金井、大泉、竹早の四校があった。附属大泉中学校は、その後、二〇〇七年に附属高等学校大泉校舎と統合され、附属国際中等教育学校として再編されている。各校、それぞれの伝統と独自性を活かし、中学校段階における多彩な教育研究活動が行われていた。ここでは、その一部を紹介しておこう。なお、現在の教育制度に基づく附属中学校は、四校いずれも一九四七年に設立されている。

東京第一師範学校男子部附属中学校として発足した附属世田谷中学校の特徴をよく表すものに二年生・三年生を対象に行われた「選択学習」がある。「ことば探求」や「多摩川流域の人と自然」など当時としてはユニークなテーマが設定され、生徒たちの自主的な活動を重んじる教育が展開されていた。

東京第二師範学校男子部附属中学校として発足した附属小金井中学校の特徴は、大学のキャンパス内に位置するという特色を生かした研究活動にある。特に一九八三年から一九八九年に実施された「教育実地研究生指導のカリキュラムとその実践」は、教育実習における教科指導の望ましいあり方を、実践を通して多面的に追究する総合的研究として注目された。

東京第三師範学校附属中学校として発足した附属大泉中学校の特徴は海外帰国子女教育であった。一九九三年には「帰国子女と一般生との相互交流をめざす教育方法の研究―帰国生の発言力を生かすデイベートの実践」をテーマに研究協議会が開催され、多方面から大きな注目を浴びた。

一九四七年に東京第一師範学校女子部附属中学校として発足した附属竹早中学校は、課題遂行能力を

もった生徒を育成することを目標に設定される「卒業研究」が大きな特色となっている。生徒一人ひとりが自由にテーマを設定し、レポートを完成させるこの活動は、生徒の自主的な学習活動を伸ばす教育として注目を集めた。

附属養護学校の教育研究活動

附属養護学校（現在の附属特別支援学校）は、一九五三年に、附属竹早中学校長であった川口廷の尽力で同校に開設された「若竹学級」がその始原である。一九六〇年、国内初の養護学校教員養成課程が東京学芸大学と広島大学に設置されるに伴い、小学部と中学部で構成されていた特殊学級は養護学校に昇格した。その二年後には高等部設置が認められ、クラス数が増えていく中で、一九六六年に東久留米市に移転し、現在に至っている。

附属養護学校は、障害をもつ子どもたちに対する教育活動と研究活動で国内の養護学校のモデルとしての先駆的役割を果たしていた。一九八六年には「養護学校における生涯教育をふまえた後期中等教育の調査と実践的研究」が行われた。生涯学習時代の到来が叫ばれた時期に行われたこの研究は、養護学校卒業生の進路状況やアフターケア体制に関する調査研究、卒業生に対する再教育プログラムや社会参加のための指導プログラムの開発などが主な内容であった。一九八九年には「個に応じた指導と日々の教育実践はいかにあるべきか」をテーマに研究が行われ注目を集めた。

附属小学校の教育研究活動

この時期の附属小学校は、世田谷、小金井、大泉、竹早の四校があった。一八七六年に始原をもつ附属世田谷小学校は、一九四九年に東京学芸大学発足に伴い東京学芸大学東京第一師範学校世田谷附属小学校となり、一九五一年に東京学芸大学附属世田谷小学校に改称された。世田谷小学校は、研究実験校として時代に則した先進的な教育研究活動を展開してきた。一九八〇年から二年間は「人間性豊かな子どもを育てる教育課程の創造」の研究、一九八七年には文部省委託研究「学校・家庭・地域の連携に関する研究」が行われ、大きな成果をあげている。

一九五九年に複雑な経緯を経て開校した附属小金井小学校の教育研究活動は、大学キャンパス内に位置するという特色を生かした教育実地研究生指導に関する研究をはじめ、実験・実証研究校として先進的な研究活動を展開してきた。一九八三年から三年間には「自ら学ぶ力が育つ学習」の研究が行われ、生涯学習時代を生きるための基礎基本となる力を身につけるための学習指導法に関する研究が進められた。

附属大泉小学校は、一九三八年に設立された東京府大泉師範学校附属小学校に始原をもち、一九五一年に現在の校名に改称された。同校の教育研究活動の特徴はカリキュラム研究にあり、一九八六年から行われた「自己学習能力の育成」の研究成果を土台に生涯学習時代における新しい学習観と豊かな学力を育成する場としての総合学習の展開を図っている。

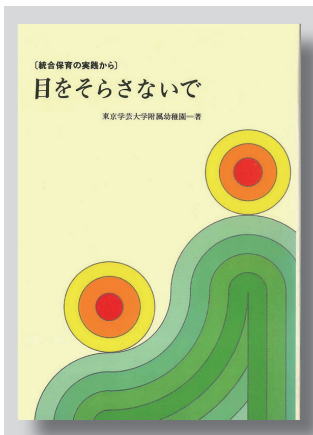
附属竹早小学校は一九〇〇年に開校した東京府女子師範学校附属小学校が前身で、一九四九年に東京

学芸大学東京第一師範学校女子部竹早附属小学校となり、一九五一年に東京学芸大学附属竹早小学校に改称された。附属竹早小学校の特徴は、幼小中連携を軸に、自らの意思で学習を持続させる子どもを育てる教育、自己教育力の育成を図る教育の研究・開発という点にあり、注目を集めた。

附属幼稚園における統合保育の開始

附属幼稚園は、現在、小金井園舎と竹早園舎の二つの園舎で構成されている。その歴史は古く、一九〇四年に開園した東京府女子師範学校附属幼稚園がその始原である。一九四九年に東京学芸大学東京第一師範学校女子部附属幼稚園となり、一九五一年に東京学芸大学附属幼稚園と改称、大学の小金井統合に伴い、一九五七年に竹早地区から園児三〇名分の定員が小金井に移され二園舎体制となった。当初は小学校内に間借りをする形であったが、一九七二年に現在の場所に小金井園舎が新築された。一九七〇年からは三年保育がスタートし、両園舎とも、遊びを通しての学びの創造をめざす幼児教育が行われている。

竹早園舎は竹早地区の特性を活かした幼小中の一貫教育、特に幼小連携の実践的な教育研究に特徴がある。隣接する附属竹早小学校の教育目標・内容と連携を取りながら実践的な保育研究が進められた。



写真V-8 全国の幼稚園関係者に大きな影響を与えた『目をそらさないで』（1984年）

特筆すべきは小金井園舎で行われている統合保育実践である。小金井園舎では、一九七八年から東京学芸大学附属特殊教育研究施設と連携し、軽度の障害をもつ幼児の保育を開始した。一九八二年からは軽度の障害児一名を定員として園児募集を開始したが、これは全国に先駆けて行われた幼稚園における統合保育であった。一九八四年に附属幼稚園が刊行した『目をそらさないで』（学習研究社）は、実際の保育実践に基づき、障害をもった子どもたちを担任がどのように指導し、かかわっていったかを詳細に述べたもので、全国の幼稚園関係者に大きな影響を与えた。

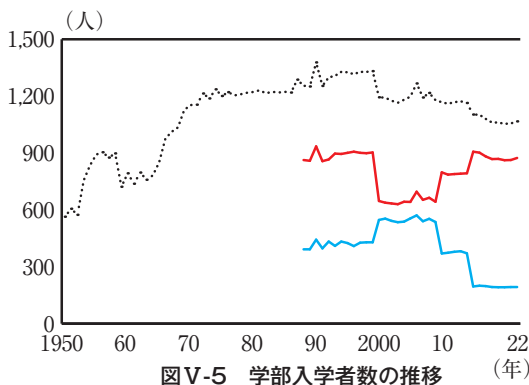
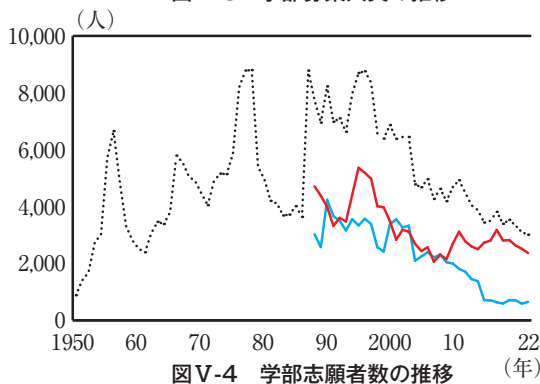
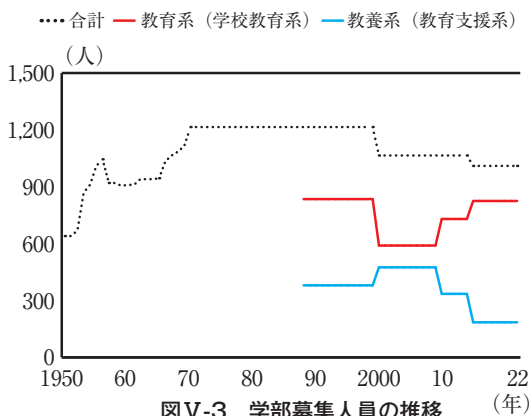
学部募集人員・志願者数・入学者数の推移

次頁のグラフは、東京学芸大学の学部募集人員数、志願者数、実際の入学者数を示したものである。一九五〇（昭和二五）年に六四〇人だった募集人員は、一九五〇～六〇年代を通じて増え続け、一九七〇年に一二一五人となった。二〇〇〇年になると少子化による一八歳人口の減少などのため募集人員は一〇〇〇人台となり、二〇二二年現在は一〇一〇人である。入学者数は年によって若干の増減はあるが、基本的には募集人員と同様の形で推移している。

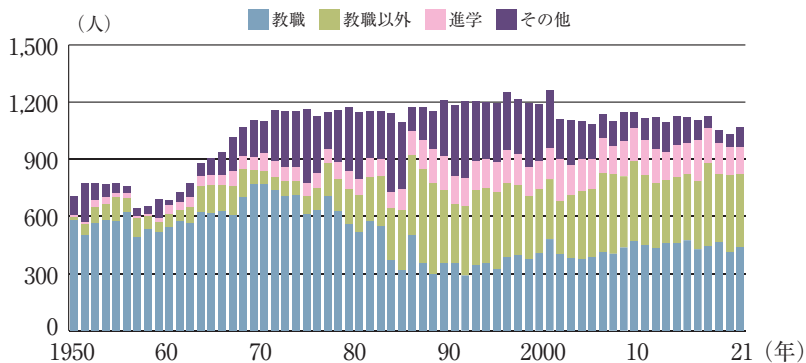
一方、志願者数は大学入学者選抜制度の変遷等の影響を受けて推移している。一九七八年まで国立大学の入学試験は一、二期校に分けられており、受験機会は二回だった。しかし一期校に旧帝国大学が集中していることや受験日程の関係から、大学間の格差感が問題となりその弊害を是正するため、一九七九年に共通一次学力試験を導入し、一期校二期校制度は廃止された。そのため一九七九～一九八六年の間は国立大学の受験機会が一回となった影響からか、学芸大の志願者数も減少している。一九八七年に入学者選抜制度が連続方式（A日程・B日程各一回受験可）になり、受験機会が二回になったことに起因してか、この年の志願者数は前年と比べ激増した。一九八九年からは、分離・分割方式（前期日程・後期日程各一回受験可）となり、現在に至っている。

学部卒業生の進路状況

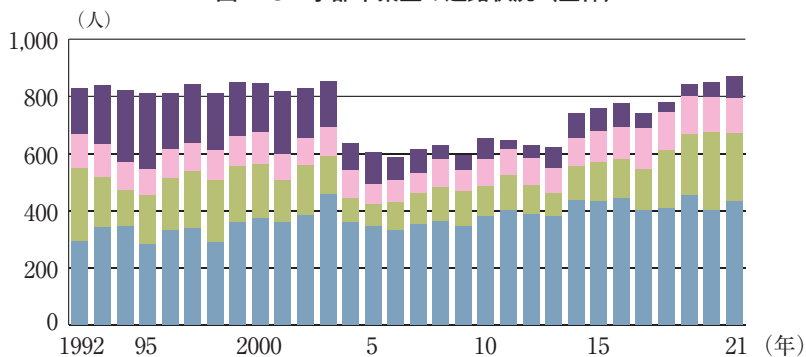
一九八〇年代後半までは、教職関係の就職者の割合は五〇%以上で、多い年は八〇%近くの卒業生が



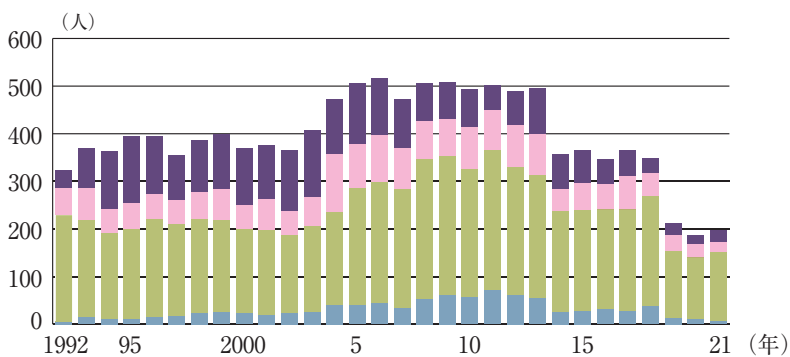
教職に就いた。一九七〇年代後半から教職就職者は徐々に減少していくが、これは一九八〇年代前半に小学校児童数がピークを迎えるという予測のもと、教員需要が抑制されたことと連動していると思われる。実際、一九六八年以降増え続けた児童数は一九八二年度にピークを迎えその後減少を続けた。一九九〇年代になると三〇％程度まで落ち込んだが、近年、教育系（学校教育系）の卒業生の教職就職率は五〇～六〇％台で推移している。一方、教養系（教育支援系）の卒業生は、教養系設置当初から教職以外の一般企業への就職や公務員等の職に就く割合が高かった。



図V-6 学部卒業生の進路状況 (全体)



図V-7 教育系(学校教育系)の学部卒業生の進路状況



図V-8 教養系(教育支援系)の学部卒業生の進路状況

東京学芸大学 150年の歩み 1873-2023 [電子版]

2023年6月30日 第一版第一刷発行

編者 国立大学法人 東京学芸大学

発行者 田中 千津子

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-6-1

電話 03 (3715)1501 (代)

発行所 株式会社 学文社

FAX 03 (3715)2012

<https://www.gakubunsha.com>

©Tokyo Gakugei University 2023

無断転載・再配布を禁じます。

ISBN978-4-7620-3245-5